

年間第 16 主日 (マルコ 6:30-34)

良い休みを学ぶとよく働き、人に良い休みを与える



「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。」(6・31) 私は、このイエスの言葉が、弟子たちに対する深い思いやりとして映りました。何らかの形で人を雇っている立場にある人々にとって、学ぶことの多い態度だなと思ったのです。

イエスが弟子たちに「休みなさい」と言っている今週の朗読箇所は、小教区で人を雇ったり、協力者を募る立場になってようやく自分のこととして受けとめることが出来るようになりました。弟子たちに配慮するイエスの姿はつねに主任司祭のお手本です。

最高の模範があるにもかかわらず、私は雇っている人々にとって良い雇い主とは言えないと思います。協力者に対しても、良い責任者ではないと痛感します。未だに、人が人のために働いているということ、十分理解していないからです。

かつて、2人の主任司祭のもとで教会の務めを学びました。雇っている人、協力者への接し方も見て学びました。当時は20代後半から30代に入るといって本当に若い時期でしたので、人が人のもとで働いていることについてほとんど理解していなかったと思います。

一方で、ある部分では雇われている身でもあります。主任司祭としてくださっているのは大司教様です。大司教様に任命された場所で務めを果たします。若い頃よりも今の方が、大司教様の期待に応えたいと考えるようになりましたし、大司教様がどんな気持ちで任地を決めて、私たちを働かせているのかなあということも考えるようになりました。

そこであらためて思い返すのです。「しばらく休むがよい。」私は、イエスのような配慮を、雇っている人に持っているのだろうか。協力を仰いでいる人に、イエスのような温かい思いやりを掛けているのだろうか。むしろ配慮にも思いやりにも、足りない面があるのではないかと思うことばかりです。

子どもたち、また学生たちは夏休みに入りました。夏休みにも、今日のイエスの呼びかけを当てはめて考えることができます。「さあ、夏休みだ。しばらく休みなさい。」やってきた休みを何となく過ごすのではなく、イエスが休みなさいと言っているのだと考えるわけです。そのことで、休みは次の学期への準備をさせてくれるはずですよ。

私の主任神父様になってくれた2人の神父様は、次によく働くために休みを取るといって上手に実行していたと思います。神父様自身のためだけではなく、主任神父様のもとで働く司祭にも、「良く休んで良く働く」ということを実践しておられたと感じました。

イエスは弟子たちにはしっかりした休みを取らせつつ、押し寄せてくる群衆には「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」(6・34)となっています。責任者が、態度で弟子たちを教え育てています。まず休みなさい。しっかり休んだら、私がして

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

いることをあなたがたもしなさい。導きが必要な人々がまだまだたくさんいるから、いろいろと教えてあげなさい。そんなふうに、イエスはご自分の働きぶりで教えてくださっています。

私たちは皆、イエスから「休みなさい」と声をかけてもらう必要があると思います。イエスが私たちにくださる休みの中で、私たちは次に備える時間を持ちます。イエスが用意した場所で休むなら、その休みは本来の姿にどのように向き合うべきかを考える良い機会になるはずです。

もっと、雇われている人の気持ちに寄り添って「休みなさい」と声を掛けてあげられる人でありたいと思いました。そして、休みから帰ってきたら、また気持ちを込めて働く人へと育ててあげる必要にも気づきました。

年間第 17 主日(ヨハネ 6:1-15)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。